

言葉の力の育ちに関する保育者の意識について (3)

- 言葉の力が生活に及ぼす影響 -

梅田 優子^{1*}、伊與部ベサニー²

要旨: 保育者が子どもの言葉の力の育ちについてどのようにとらえ、またどのような援助を意図しているのかを明らかにすることを目的として、半構造化面接調査を行った。その調査内容のうち、言葉の力の育ちが、現在の園生活や未来の生活にどのような影響を及ぼすと保育者がとらえているかについて分析・考察を行った。その結果、園生活で言葉の力がある子どもは、コミュニケーションが成立しやすく、様々な人と関わり、その中で興味・関心の幅、体験が広がると捉えていることがみえてきた。また、子どもたち同士の中で、リーダー的な役割をとる体験を重ねていることや、遊びの中心になることで、遊びの満足度が高いのではないかと捉えている傾向がみられた。さらに、やりたいことや自分のアイデアが言葉で表現されることで、保育者の援助がなされやすくなり、その子ども自身がやりたかった遊びができたり、アイデアが形になっていく体験がなされやすいと捉えている保育者もみられた。未来の生活への影響として、保育者は話せた方が社会に出たときにコミュニケーションがとれる、学校生活への適応において大切な力となるとの捉えをしていたが、全体としては漠然とした内容となっていた。

キーワード: 保育者の意識、言葉の力の育ち、園生活への影響、未来の生活への影響、半構造化面接

1. 目的

幼児期における言葉の発達は著しく、保育者が子どもの言葉の育ちを援助することは大切な保育内容に位置づけられている。しかしながら、これまでは子どもの言葉の発達の変容に焦点が当てられている研究がほとんどであり^{1,6)}、保育者に焦点を当てた研究はあまりなされていない現状にある。その数少ないものの一つとして、横山⁷⁾が、保育者としての立場から3歳児以上の実践場面をとりあげている。横山は保育者が子どもの「主観的な空間」を理解し、それを変える働きかけをすることにより言葉の背景も変わり、言葉が豊かに生まれる可能性をひらくと述べている。他には絵本の環境⁸⁾や、入園時の保育者が読み聞かせの間にどのような動作や発話をしているのか等を検討している研究⁹⁾

がみられるが、限定された場面での保育者の環境構成や援助となっている。そこで、保育者が子どもの言葉の力の育ちについてどのようにとらえ、またどのような援助を意図しているのか、保育者へのインタビュー調査を行った。

その調査結果について報告をおこなってきている^{10,11)}が、保育者が、子どもの言葉の力が育っていることが、現在の園生活及び未来の生活においてどのような影響を及ぼすととらえているかの回答についてはまだとりあげていない。平成20年告示の幼稚園教育要領の改訂における一つの柱が幼小の連携であった。保育所保育指針でも同様である。さらに平成22年の、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のあり方に関する調査研究協力者会議による報告において、幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉え

¹ 新潟県立大学人間生活学部子ども学科 ² デュケイン大学

* 責任著者 連絡先: 新潟市東区海老が瀬 471

利益相反: なし

る考え方の普及を図ることが打ち出されてきている。保育者に現在及び未来の生活への影響や連携についての視点があるのか等の捉えも、その援助に反映されるものとする。そこで、本稿においては、3～5歳児の幼児期において、言葉の力の育ちがあることが、幼児期の園生活や未来の生活にどのような影響を及ぼすと保育者がとらえているかについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

調査方法：午前中に保育参観をおこない、午後からインタビューをおこなった。インタビューは原則的に1人あたり1時間程度とし、レコーダーとメモを用いて記録した。面接の開始時点で、研究目的について説明をおこなったあと、日本語を母語としない面接者もあり、面接者がインタビュー対象者の回答内容をきちんと理解することのできるよう録音を行いたいこと、録音された記録は面接の実施者のみが使用すること、インタビュー内容について発表をおこなう際には園や個人が特定されないようにすることについて説明を行い、対象者の許可を得て録音をおこなった。

調査時期：2013年6月～9月

調査対象：新潟県内の保育施設（幼稚園及び保育所）4園において、3歳児～5歳児のクラス担任をしている保育者13名と、施設長・教頭・主任等4名（経験年数レンジ：3～40年）である。
質問項目：面接者2人がガイド用紙を手元におき実施した。項目は、「言葉の力から想起されること」「子どもの話すことと聞くことの育ちについて」「言葉の力が子ども達の園生活や未来の生活に及ぼす影響」「子どもの年齢によって、言葉の力の育ちとして期待していることに違いはあるか、あるとすればどのような育ちか」「言葉の力の育ちを意識した活動や援助」といった内容である。これらの質問を、インタビュー対象者の状況や回答に応じて順序を入れ替えるなど半構造化面接をおこなった。方向性を保ちつつも、インタビュー対象者の語りによって情報を得ることが、今回の探索的な取り組みにおいては必要と考えたからである。本稿では、これまでの報告¹⁰⁻¹¹⁾でとりあげてこなかった「言

葉の力の育ちが子ども達の園生活や未来の生活に及ぼす影響」への回答をとりあげて分析考察する。

III. 結果と考察

1. 言葉の力が園生活に与える影響

分析にあたっては、面接の逐語録を作成し、意味の単位ごとにセグメントとして切り出し、各セグメントに定性的コード（以下コード）をつけた。コードごとにセグメントの内容を読み返し、コード間の差異を明らかにしながら、必要な箇所はコードの再割当てをおこなった。さらに、内容の関連が深いコードをカテゴリとしてまとめた。結果を表1に示す。

表1 言葉の育ちの園生活への影響

カテゴリ	コード	言及数
かかわり・体験が広がる	いろいろな人と関われる	7
	体験や興味・関心の幅が広がる	4
中心的存在となる	リーダーになる	4
	遊びの中心になる	2
	自分の思いを実現していきやすい	3

(1) かかわり・体験が広がる

言葉の力の育ちのあることが今の生活に及ぼす影響として、子どもの園生活でのかかわりの広がりへの言及がなされていることがあげられた。

1) コミュニケーションがとりやすく、いろいろな人と関われる

友達関係のいろんなうねりというか、本当に言葉でアピールできたり、思いが言えると、それこそ5歳になったら、いろんな友達と本当に関われる。(3歳児担任)

[最後の()内は、インタビュー時の担任クラスである。記載なしは、園長・教頭・主任といった立場となっている。以下同じ。]

クラスの中で、1日実習生のお姉さんが来てくれても、一言も会話ができなかった子って多分何人か居ると思うんです。その子たちに比べれば、もう自分からドンドン行って、お話ししたりとか、「僕の名前覚えてね」とかって言う子は、やっぱり関わってる経験が、きっと多いですよ。(5歳児担任)

話す力があるほうが、友達とのコミュニケーションは取りやすいと思います。うちの今の子どもたちでも、ちょっと自分のこと、話を遠慮しちゃって言わなかったり。あと、友達のことを、どう思うかを考えるがあまりに自分が出せなかったりする子がいるので。そういう子は、コミュニケーションがちょっと今うまくできなくて、私も支えてるところなんですけど。相手のことを考えられるって力はすごいと思うんですけど、考え過ぎてしまって自分を出せないみたいなことになってしまうと、やっぱり、言わなければ伝わらないことももちろんあるので。コミュニケーションの手段として言葉をいっぱい使える子のほうが良好に、みんなと関わっていけるんじゃないかなというふうに思うので。(5歳児担任)

言葉の力の育ちがあることで、コミュニケーションが成立しやすく、様々な人と関われるようになり、その体験が増えていく、と保育者がとらえていることが見えてくる。そして、その体験の中で、相手の思いを知ることなどができていくととらえる反面、相手のことを思うあまり、言葉で表現することをためらう子どもたちへのまなざしもあり、それを言葉による表現へとつなげていこうとする姿勢が窺える。

2) 体験や興味・関心の幅が広がる

関わりの中で、その子どもの体験や興味・関心の幅が広がることに言及しているものもあった。

この前もあったんですけど、セミが孵化していくのを、全部お父さんに写真を撮っ

てもらって、さなぎのときからもうその一晚の様子を少しずつデジカメで撮ってくれたんです。そしたら、自分は、そのこと発表したいと、みんなに聞いてもらいたって言って、じゃあそうしようって言って、その場を設けて、その子が、その写真を一つ一つこうやって説明を。もうほんとにでも、私たちも、「ああそうなんだ」って言って、上手なんです。そういうことで、やっぱりこう自分が発表したいことをみんなが興味を持って聞いてくれたと。(中略)その発表してる子自身も、やっぱりその経験がいい経験になってるんじゃないかって思うんですけど。今の段階としては、やっぱり、そういう子のほうが、いろんな体験が多いような気がします。(5歳児担任)

影響があるか……。影響はあります。私はあると思って。人が広がると、友達が持ってる興味のものに対してもいくというか、人が幅広いものにも幅がこう(出て)いくかなって感じで。(5歳児担任)

言葉の力の育ちは、自分の体験や思いを言葉で表すことができることにつながり、それがその子どもの様々な体験の広がりを生み出していくことになっていると保育者はとらえている。また、関わった相手のもっている興味の対象にもその子どもの興味・関心が広がっていく傾向があるととらえている保育者もいる。

さらに、関わりがあることで、葛藤したりなど、精神的な面での体験が広がっているとの言及も以下のようになされていた。

4歳の頃だとやっぱりみんなで遊んだり、集団で遊んだりするところが多くなると思うので、その中でやっぱり自分の意見をパンと言えたりとか、言えるからこそぶつかって、ちょっと我慢しようとか、その葛藤ができたりとか。やっぱり、言葉が話せる子ってそういう場でぶつかることもできるし、あ、あの子そう言ってたなって聞くこともできるから、そういう違いはもしかしたらあるのかなと思って。(3歳児担任)

かかわりのなかで、葛藤体験も経ることとなり、その体験ができることを意味あるものと捉えていることが窺える。

(2) 中心的存在となる

言葉の力の育ちがあることは、グループ活動や遊びの中で中心的な存在になる体験が多いととらえていた保育者もみられた。

1) リーダーになる

そうですね、例えばグループを作ったときに、リーダーとして、引っ張っていくっていう、みんなに声を掛けるとか、ここ、こうしよう、こうしよう、こうしようっていうのが、できていきますので、そういう面では頼りになる存在にはなってるかなと思いますけど。

やっぱりこう自分の思いをはっきり言えるちょっとリーダータイプの子が遊びを引っ張っていて。だからやっぱりその自分で言えない子はただ付いてってみたいとか。遊ぼうとするけど、え、何とかくんは駄目だよ、入れてあげないとかっていう。じゃあ他の子がどうかっていうとやっぱりそっちのリーダーのほうに流れていっちゃうんで。先生入れてもらえなかったーなんていうふうに来たりとかするので。(4歳児担任)

影響力は大きいです。お友達を……。やっぱりお友達も、「ああ」ってついてく。遊びの中でも、その子がリーダー的な感じで、いい意味でリーダー的になって、「じゃあこうしよう」って言ったら、やっぱりそっちのほうは「いいね」って。(5歳児担任)

子どもたち同士の中で、リーダー的な役割を果たしていく頼りになる存在でもあるが、反面、その子どもの意見で全体が動いてしまうことも把握している。その両面を踏まえつつも幼児期は、言葉の力の育ちのある子どもが、リーダー的役割をとることが多く、リーダーとしての体験を重ねることにつながっていると、とらえていることが見えてきた。

2) 遊びの中心になる

リーダー的役割と重なっている面もあるが、その役割体験を積み重ねるという視点よりは、それによって、遊びや活動における満足度が高いのではないかととらえている保育者も見られた。

やっぱり、そういう自分の思いを、うまくこう、言葉に表現できる子のほうが、遊びの中心にいたりとか。遊びをこう先頭きって進めていったりとか、いろいろ遊びの方向性変えていったりとかはしてるので。やっぱりこう、自分がこうしたい、ああしたいって、わりとこう、自己表現が強かったりとか、自我が強かったりする子っていう子は、もう自分のこれをしたんだ、これはしたくないんだっていうことを、すごく表現するから、それやっぱり、自分で、出せてる分、ある程度、満足したりしてるころの点が多いんじゃないかなと思うんですけども。(3歳児担任)

言葉がスムーズに出る、聞けたり、発することができる子っていうのは、遊びも自分の満足できるところまでできてるんじゃないかなとか。トラブルが多いと、ほんとは楽しくというか、自分のしたいことをしたいのに、それが周りとの調和が取れなくて、ちょっと繰り返してしまうという部分もあるのかな。でも、それもよく、その子がちょっとでも出せたり、楽しくできるように見てあげなきゃかなって。(4歳児担任)

遊びの中心となり、自分の思う方向に遊びを進めたり、自分したいこと、したくないことも出せるので、ある程度満足できるよう遊びが進められていると、遊びの満足度と結びつけて語られるところに特徴があった。

3) 自分の思いを実現していきやすい

言葉でやりたいことや自分のアイデアを表現できることで、保育者の側もその子どもの思いや興味・関心の方向性を感じ取ることができ、

それを実現してくかわりができるとの言及もあった。

言葉だとやっぱり。その、今日、ごっこ遊び、ちょうどしてたんですけど。あの、あのジュースがあったんですけど。そう、ちょうど昨日、あれは子どもが、水が飲みたいって最初始まって。で、私がペットボトルに水入れてあげて。それもこう言葉で自分が表現したものが形になったっていう経験が。で、そこで他の子がメロンジュースが飲みたいって言って。それをこう、(私が) 形にしていったんですけど。やっぱりそう、何ていうんですかね。(中略) よりこう積極的に、創造的に遊べるようになるのかなとは思いますがね。(4歳児担任)

自分の考えていることを、やっぱり一番簡単に伝えられるのが言葉かなとは思いますが。例えば、その、1対1だと、その子の目と目ってというか、表情とか、そういう態度で、やっぱり分かってあげられる部分あるんですけども。複数のこういう、十何人なっちゃうと、やっぱりどうしても先生、先生って言うてくる子のほうに、気持ちじゃないけど、耳がやっぱりいってしまう。そうすると、やっぱり、自分のほうから、なんか本当は、なんか先生に言いたいんだけど、なんかちょっと言えないなーみたいな子はなかなか……。でも、こっちもやっぱ、分かってあげれないから。うん、なんか、ほんとは分かってあげるようにすればいいんでしょうけど。(3歳児担任)

子どもが言葉で表現してくれることで、大人である保育者にはわかりやすく、援助につながりやすいことは否めない。結果として、その子ども自身が、自分のやりたかった遊びができたり、アイデアが形になっていくなど、自分の遊びがつけられ広がっていく体験となりやすいと捉えている。

2. 未来の生活への影響

未来の生活への影響については、「子どもの

変化」についての言及と、「社会生活で大事な力となる」ことや「言葉に関わる興味・関心が発展する」といったように、言葉の力の育ちがその後の生活に及ぼす影響についての言及との大きく二つの方向性があった。

(1) 変化について

変化していく可能性についての言及は、自分の言葉で語ることの少ない子どもに焦点が当てられての語りとなっていた。

<変わる可能性がある>

幼稚園のときにちょっと言葉あんまりできなかったけど、小学校を通して元気なお友達とお友達になって、自信に満ちあふれた子になることもあるのかなあとかと思えますけど。(4歳児担任)

将来的、そうですね、将来、あの子どもたちはどうなっていくんだろうな。今も、将来的にもそうなるのかな。でも、今ちょっと乏しい子ども、私の友達もそうだったんですけど、ちっちゃい頃あんまりしゃべんなくなって思ってた子ども、やっぱりいろんな経験する中で、出会いとかで、わ、この子よくしゃべる子になったなーみたいな子が居るので。言えないかな。そこはやっぱり出会いとかによるから。(5歳児担任)

私自身で言うと、私もちっちゃいときは、そんなしゃべるほうじゃない、おとなしく、何するにもゆっくりだったし。活発に積極的になんか手を挙げなかったし、先生先生って行くほうじゃなかったし。気付いてもらってできるタイプだったけれど、やっぱり、この仕事にもよるのかなと思うんです。どうしても、お母さんとお話をしなきゃ駄目なことっていうので、前よりはお話ができるように(####)。だからそういう環境によって、やっぱりちっちゃいときのがいつまでもいくわけじゃないのかなっていう気持ちがある。だから今話せない子どもたちでも、そんな積極的にこうポンポンいく子じゃなく

わったの? ってなって・・・。(5歳児担任)

[(###)は、録音内容が聞き取れなかった部分である]

未来については、友達や自分の経験などから、変化の可能性について語られているところに特徴があった。

<大きくは変わらない>

現在、話す力のある子どもはそのまま、仲間関係も広がって、活発でいられるのではないかと捉えている保育者がいた。

きつとしゃべれる子はまた仲間関係も広がって行って。で、きつとその仲間同士でこう話せば通じ合うじゃないですか。なので、こうまたいろんな考え方ができるようになって。また活発になっていくのかなとか、思いますし。やっぱり言葉上手に、上手じゃないですけど。ちゃんと自分の(思いを)伝える子はやっぱりこれから先上がっても結構活発になっていくんじゃないかなあっていう。(4歳児担任)

また、話す力のあることも、話すことへの苦手意識があることも変わらないようだといっている語りもあった。

そのまま強い子は強い・・・。やっぱり、弱い子には弱い子の持つ力っていうのがあるから、それを引き出して行って自信につなげていければいいんじゃないかなと。

うちの子ども3人居て、3番目は理論的のものを言うの。3番目は、今、会社に勤めてるんですよ。その会社では、理論的に話せっていうのをね。それを、落ち着いて話すっていう訓練させられて。でも、よく見ていくと、この子は口下手だから、やっぱり話したいんだけどどうやって話していいか分からないっていう部分がある。だから、ずーっとそれに悩んでるみたい。だから、それはずっと続いてるんです。だから、できるだけ普通に人と話される方がいいんじゃないかなと。苦手意識を持たせると駄目なんじゃ

ないかなと思う。そこを保育者はよく一人一人を見て、そうならないように声掛けてやらなきゃ駄目なのかなと思う。自分をよく見てくれてるんだなと思えばうれしいし、不安にならなくていい、安定するんじゃないかな。

環境の中で変化するところもあるが、ずっと変わらずに続く部分もあることを自分の身近な人の様子から考えている点は、変わる可能性について述べている保育者とも共通している点であった。

(2) 社会生活で大事な力となる

<コミュニケーションに必要となる>

社会出たときに、やっぱりそこコミュニケーション(に影響する)。黙ってるよりはきちんとお話ができたほうが、社会の中で生きていくには、自分がかんうし。ごめんなさい。ちょっと矛盾してるようなこと言ってますね。(3歳児担任)

やっぱり社会に出たときに、生きていく力につながる。生きていくための力としては、それが必要なと。生きていくためには、友達も必要だったり、ちょっと、そこは矛盾してますけども。ちょっと変ですね。

話しができたほうが、社会に出たときにコミュニケーションがとれていくのではないかと捉えている。自分の発言が矛盾していることに言及している保育者は、現在言葉で話せなくてもその子どものよさを受け止めていくことが大切と発言した後に話していることによる。話さない子どもの在りようをあるがまま受け止めることが大切と保育の上では意識しつつも、話せないよりは話せた方がよいとも考えていることが見えてくる。

<学校生活で大切となる>

あの、多分ここ(園)でその力(言葉の力)をつけていくことによって、小学校に行っ

てからそういうのってすごく大切になっていくんだと思うんですね。

ちょっと広く言ってしまうえば、いじめとか。うん。やっぱり、嫌なときに、嫌って言える。言葉で。声が出せるっていうのも。やっぱりそれも、こう、自分が発した気持ちを、言葉で発した気持ちを誰かが受け止めてくれるっていう経験があれば。きっと大きくなって、助けてって言えると思う。やめてとか。どこまでね。つながるか分かりませんが。そういうふうにも、役立つのかなと思いますね。(4歳児担任)

話すもそうなんですけど、聞けないでいたりすると、何かみんなでしましよって、活動があるときに、保育園だったら何か作るとか、園庭でみんなで何かをするっていうときに、ほんとはできるし、理解すればできるのに、その1回のみんなと同じ説明じゃ入り切らなくて、始まったときに分からないでしまったり。やっぱり小学校とか上がってもきっと話を聞く力、話すことも、聞くことも大事なんじゃないかなと思うので。(4歳児担任)

言及されている内容はそれぞれ異なるが、言葉の力が大切になることや、必要なときには助けてと言えること、話を聞いて理解して動くなど、学校生活においてより必要となるのととのらえがあることが窺える。

(3) 言葉に関わる興味関心が発展する <本を読む>

今の時期、お話が好きな子は、やっぱり、本読むようになるんじゃないですか。(4歳児担任)

<他言語への関心>

言葉への興味があればそれこそ、いろんな言葉をね。しゃべってみたり。英語とかあるんじゃないかと。(4歳児担任)

言葉への興味が発展的につながっていることに言及しているものもみられたが、非常に漠然

とした捉えとなっていた。

総合考察

言葉の力の育ちが子どもたちの現在の園生活に与える影響として、保育者に挙げられていたのは「かかわり・体験が広がる」と「中心的存在となる」ことであった。これらは「言葉の力」を「話す力」に力点をおいて捉えているところに共通性がある。

かかわり・体験の広がりとしては、言葉の力があることで、コミュニケーションが成立しやすく、様々な人と関われるようになること、そうした関わりの中で、その子どもの興味・関心の幅が広がると捉えていることがみえてきた。また、人と関わることで、違う意見が聞けたり、葛藤したりなど、精神的な面での体験が広がっているのととのらえもなされていた。

中心的存在となることについては、子どもたち同士の中で、リーダー的な役割を果たしていく頼りになる存在となっていると捉えていた。良くも悪くも、その子どもの意見で全体が動いてしまうことがあるが、幼児期は、子ども同士のかかわりが始まって間もない時期でもあり、リーダー的役割をとることの体験をしていく時期ととのらえていた。また、遊びの中心になることで、自分の思う方向に遊びを進めたり、自分のしたいことやしたくないことを出せるので、ある程度満足できるよう遊びが進められるのではないかと、遊びの満足度と結びつけて捉えている傾向もみられた。

また、言葉でやりたいことや自分のアイデアが表現されることで、保育者の側がその子どもの思いや関心の方向に添った援助が可能となり、その子ども自身が、自分のやりたかった遊びができたり、そのアイデアが形になっていくなど、自分の遊びが広がっていく体験となると捉えている保育者もみられた。

未来の生活への影響として、話ができただけが、社会に出たときにコミュニケーションがとれると考えており、話さない子どもの在りようを受け止めつつ、話せる方向への援助を志向していることがみえてきた。

また、子どもの変化について言及した保育者がみられたが、変化する可能性に言及した場合

も、大きなところでは変わらないと言及した場合も、子どもたちの育ちを見通してというよりは、自らのことや身近な家族や友人の姿から答えることに共通性があった。小学校での生活に言及している保育者も存在したが、漠然とした回答となっており、「幼小連携」や「接続期」といった児童期の教育等を見通した具体的な言及がなされることはなかった。

平成22年の、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のあり方に関する調査研究協力者会議による報告において、幼小の接続期には「教育の目標を『学びの基礎力の育成』という一つのつながりとして捉えること」¹²⁾、その学びの基礎力の育成を図るため、「三つの自立」として、「学びの自立」「生活上の自立」「精神的な自立」を養うことが必要であるとされている。このうちの「学びの自立」は、「自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる活動を自ら進んで行くとともに、人の話などをよく聞いて、それを参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考えなど適切な方法で表現すること」¹³⁾ であるとしている。さらに、実際的な教育活動については、遊びの中での学び（幼児期）と各教科等の授業を通じた学習（児童期）の違いがあるものの、『人とのかかわり』や『ものとのかかわり』という直接的・具体的な対象とのかかわりで幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して、幼児期から児童期の教育への円滑な移行を図ることが必要とされている。その中で「人やものとのかかわりを支えるために重要な役割を担うのが言葉や表現である。言葉や表現は学びの基礎力を育む上で極めて重要であり、学びの基礎力が育まれる中で言葉や表現も発達していく。こうした言葉や表現の重要性を踏まえ、言葉や表現を通じた他の子どもや教職員・保護者とのやりとりを行うことで気付きや思考を深めようとする活動が展開されるよう留意することが必要」¹⁴⁾ とされている。

これらの記述内容から「接続期」において、言葉の力の育ちが大きな位置をしめることは明らかである。一方で、この報告書において、「一般に、幼児期の教育を担当する教職員は児童期の教育にあまり関心を示さず、幼児期の教育とそれ以降の教育との関係を十分に理解・意識せ

ずに幼児を教育する傾向があり、また、児童期の教育を担当する小学校の教員は、幼児期の教育にあまり関心を示さず、十分理解・意識せず、あたかも児童を白紙の状態から指導しようとする傾向があるといわれる」¹⁵⁾ とも述べている。今回の面接調査においても、そうした傾向があることは否めない状況にあったといえるだろう。「接続期」についての考え方の普及や、実際的な取組はまだまだこれからといった状況であり、今後の課題であると考えられた。

謝辞

保育参観及びインタビュー調査に、お忙しい中ご協力くださいました園長先生はじめ先生方皆様に心より御礼申し上げます。

文献

- (1) 大久保愛 (1975) 幼児のことばと知恵. あゆみ出版
- (2) 岡本夏木 (1982) 子どもとことば. 岩波新書
- (3) 正高信男 (1991) ことばの誕生. 紀伊国屋書店
- (4) 麻生武 (1992) 身ぶりからことばへ. 新曜社
- (5) 淀川裕美 (2011) 2 - 3 歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化 - 確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して -. 保育学研究 49 (2) . 61-72
- (6) 淀川裕美 (2013) 2-3 歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化 - 伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して -. 保育学研究 51 (1) . 36 - 49
- (7) 横山洋子 (1998) 子どものことばが生まれる背景としての空間 - ことばの視点からの保育場面の考察 -. 保育学研究 36 (2) . 38-44
- (8) 山田恵美 (2011) 保育における空間構成と活動の発展的相互対応 - アクションリサーチによる絵本コーナーの検討 -. 保育学研究 49 (3) . 20-28
- (9) 並木真理子 (2012) 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響. 保育学研究 50

- (2) . 75-89
- (10) 梅田優子・伊與部ベサニー (2014) 言葉の力に関する保育者の意識について. 人間生活学研究第5号. 53-62
- (11) 梅田優子・伊與部ベサニー (2015) 言葉の力に関する保育者の意識について (2) - 各学年への期待・活動及び援助—. 人間生活学研究第6号. 13-26
- (12) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について. (2010) 文部科学省. 25
- (13) 同上 (12)
- (14) 同上 (12)
- (15) 同上 (12)

ABSTRACT

Investigation into Japanese Early Childhood Care and Education Professionals' Consciousness of Language Development in Children (3) (Influence of verbal communications skills on children's lives)

Yuko Umeda¹, Bethany Iyobe²

¹ Department of Child Studies, Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

² Duquesne University

* Correspondence, University of Niigata Prefecture, 471 Ebigase, Higashi-ku, Niigata 950-8680, Japan

A semi-structured, interview style survey was conducted to explore how early childhood education professionals and daycare teachers approach the development of verbal communication skills of the children in their care, and what, if any, activities they consciously employ to that end. This paper summarizes a component of the data that illustrates what effects these professionals and providers consider verbal communications skills to have on children's experiences at daycare and in their future lives. The respondents believe that children with developed verbal communication skills can easily manage their interactions and interact with a variety of people, which in turn allows them access to a wide range of feelings and experiences. Furthermore, the respondents sensed that children with high verbal communication abilities tended to take on leadership roles during play and other children gravitated towards them. The respondents said that this led to seemingly high levels of satisfaction in the communicative children. The respondents sensed this might be due to the connection between children's abilities to express their needs and ideas clearly, thereby making it easier for teachers and caregivers to respond to their needs, more cooperation from peers in accepting their ideas in play, and in general having their ideas come to fruition. In addition, respondents said that, in general, verbal communication skills were important for children's future lives in education and society at large. However, the responses in this section varied widely with examples from respondents' personal lives and experiences rather than those of the children in their care. The results of this survey indicate that there is possibly yet work to be done to ensure an appropriate process in the development of verbal communication skills from early childhood education through to the elementary schools

Key Words: early childhood care and education professionals' consciousness, language development, influence on daily experiences, influence on future lives, semi-structured interview